「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

北海道のあしたの森を育てる
コープ未来の森づくり基金

コープ未来の森づくり基金は、
組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol. 32
Oct. 2026



森づくりに入る前に

森の隣人、ヒグマと私たちの
付き合い方を知ろう

編集後記

ヒグマについての見方はさまざまです。怖い、強い、害がある。あるいは美しい、かわいい、神々しいなど。これほどの多面性のある動物というのはあまりいないし、それほどヒグマは魅力的だということでもあると思います。そんな動物が身近に生きていることは、実はとても貴重なことでもあり、そのことをもっと知ってほしいとも思います。一方でやはり近すぎる距離は脅威でもあります。私たちが抱えるこのジレンマについては以下の引用の通り、本当に真剣に向き合わなければ解決を見出すことはできないのだろうと感じています。

“近くに熊が生息していることはわれわれの生活を豊かなものにするが、人間との衝突を減らすためのさまざまな要素を考慮しなければならないということでもある。どれだけ意欲的な試みであっても、熊との共存を考えるなら、大型肉食獣と環境を共にすることに対する地域の人々の真摯な取り組みなしには、熊を受け入れるためのいかなる対策も成功しない。”

「熊　人類との「共存」の歴史」
（ベアント・ブルンナー 著／伊達淳 訳／白水社）より

モリイク vol.32　　2026年10月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

ミックス
紙｜責任ある森林管理を支えています
FSC® C014687
VEGETABLE OIL INK
この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

つなぐ
COOP SAPPORO



モリ*イク

* contents *

*03 運営委員長着任の挨拶
さまざまな森づくりのカタチ、これからも引き継いで

*04 あそびにいこうよ！　森の中へ
どんぐりはかせの森あそび研究所

*06 特集　ヒグマとの距離を考える
～クマと私たちの間に～

*12 最北の添
野つけうるし

*13 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語

*14 ほっかいどう　森のイキモノSOS
虫たちはどこに行くの？

*16 木育essay
生物多様性の森 ―虫のきもち

*17 Fの森の今を伝える
Fの森通信

*18 コープ未来の森づくり基金報告
植樹会報告など

さまざまな森づくりのカタチ、これからも引き継いで

～あすもり運営委員長着任にあたって～

林業の学びを続けていると、ときに新たな道を拓く出会いがあります。

2013年春、福島中部の阿武隈山地を地元の森林組合の案内で巡りました。太平洋岸には放射線防護服を着た人々が行き交い、上下逆さまの車が転がっていた頃です。

田起こしの終わった田んぼの奥には芽吹き始めたコナラの林がありました。放射性物質はどう目を凝らしても見えません。目の前の山に近づいてよいのかどうか、そもそも何から調べ始めればよいのか――皆目わからず、案内人の傍らで所在なく立っていました。どう取り繕ってみても勉強不足でした。

広大かつ起伏のある森林の除染は見送られ、放射性物質を未だにため込んだままです。阿武隈山地はしいたけ原木の一大産地でしたが壊滅しました。春の山菜も秋のきのこも食せなくなりました。原子力災害に終わりは見えません。

こうした未曽有の難問を一緒に考える末席にいます。放射性物質に覆われた森林とどう付き合えばよいのか。苦悶の先が見えない日々です。その場に立ち合い、出会いを重ねる中で、林業の学びへの覚悟を決めた気がしています。

昨年からコープさっぽろの森林づくりに顔を出しています。「コープ未来の森づくり基金」（あすもり）です。さまざまな立場で森づくりに向き合う組合員や職員、専門家の方々と出会い、新たな経験と発見の連続です。

ご承知のとおり、コープの森林づくりは、効率的な木材の生産を目指す産業的な森林造成とは趣が異なります。林業経済学を学ぶ私にとって、産業の視点とは異なるコープの森林づくりの現場は当初、別世界のように映りました。

組合員有志が一からつくる「Fの森」（当別町）を初めて訪れたとき、どこに森があるのだろうと訝りました。森にしては見通しが効いたからです。

「Fの森」では、元牧草地を百年前の北海道の森の姿に戻すべく、いろいろな樹種を植えています。その成長はまちまちで、丘陵全体が木々にまだ覆われているわけではありません。

そこには、同じ樹種の木々を一斉に育てて収穫する産業的な森林づくりとは一線を画した森林観があります。気の遠くなる時間軸での試みです。

さまざまな森林の見方があり、それに応じて関わり方もまたさまざまである。「Fの森」に出会わなければ、頭で理解したとしても、腹に落ちることはなかったでしょう。

恥ずかしながら、あすもりが、道内各地の森林づくり団体をサポートしてきたことも知りませんでした。北海道に居を構えておきながら、遅ればせながら気づくことばかりです。勉強不足を痛感する中で周囲の心遣いが身に沁みています。

さまざまな立場の人々が関わる面白さと難しさ、技術的に未確立な多様な樹種による森林づくりの行方、そしてこの試みの母体である生活協同組合の役割――新たな出会いから、新たな学びを始めています。

あすもりは2008年に創設されました。買物時のレジ袋辞退が活動の原資です。設立以来、組合員から託された基金の運営委員長を務めてこられた柿澤宏昭・北海道大学名誉教授からこのたびバトンを受けました。身に余る重責です。思いをつないで参ります。

早尻 正宏

北海学園大学経済学部 教授　　コープ未来の森づくり基金 運営委員長



1979年広島県呉市生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了。林業者が安心して働き暮らせる未来を目指し、北海道を拠点に福島原発被災地・大分国東半島・スウェーデンに足を運んで学びを重ねています。主な著書に『福島に農林漁業をとり戻す』（みすず書房）、『地域の再生と多元的経済』（北海学園大学出版会）、『しいたけと3.11』（新泉社）など。



どんぐりはかせの 森あそび研究所

その⑦　木の冬芽を観察しよう



冬芽ってなに??

冬の森で木々を見ると、葉っぱを落として、すっかり冬眠しているように見えます。でも、その枝先には、春に葉っぱや枝、花を咲かせるための芽がしっかり準備中。樹木の枝についている、冬の芽のことを「ふゆめ」といいます。冬の森で木々の冬芽に注目してみましょう♪

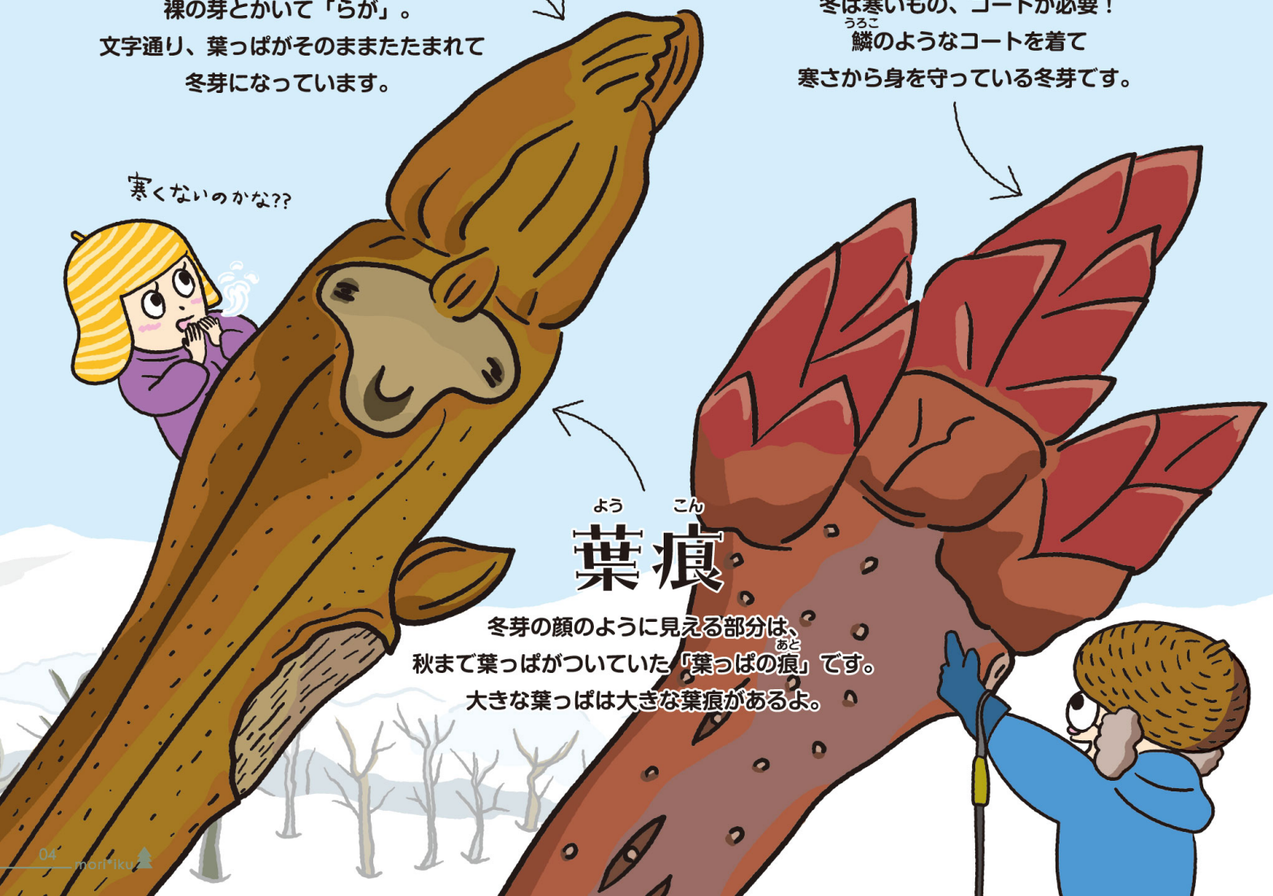
冬芽のタイプ　冬芽には裸芽と鱗芽などのタイプがあります。葉痕とセットでついていることが多いので、葉痕の形にも注目!

裸芽

裸の芽とかいて「らが」。
文字通り、葉っぱがそのままたたまれて
冬芽になっています。

鱗芽

冬は寒いもの、コートが必要！
鱗のようなコートを着て
寒さから身を守っている冬芽です。



葉痕

冬芽の顔のように見える部分は、
秋まで葉っぱがついていた「葉っぱの痕」です。
大きな葉っぱは大きな葉痕があるよ。



おもしろ冬芽 No.1
オニグルミ

動物の顔に
見えるよ。
サル? ヒツジ?





インパクト冬芽 No.1
オオカメノキ

一度、見たら忘れない。
バンザイしてる?
ウサギさん?
パ○タン星人!?





大きなぼうし？
ドロノキ

葉痕に丸い目と口が
ついていて顔に!?
虫眼鏡で見てみよう。



いろんな冬芽 いろんな葉痕

冬芽は木によっていろんな形をしているよ。
よく見てみると、かわいい形や、
動物の顔に見えるものなど、面白い♪

写真提供／自然ウォッチングセンター

森のちいさなピエロ
キハダ



大きな鼻の
ピエロ
そっくり!





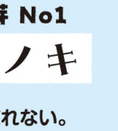
冬の女王様！
クズ

クールなお顔に
イヤリング?



ふわっふわ♡
キタコブシ

ふわふわコートが
あったかそう♪
そっとさわって
みてね!



わたしの冬芽みつけた！

見つけた冬芽の顔を
スケッチブックに
スケッチしてみよう！





お気に入りの冬芽を見つけたら、名前を付けたり、何の動物に見えるか考えたりして、「わたしだけの冬芽」を絵に描いてみよう。ともだちと見せ合いっこするときっと楽しいよ！

冬芽の本もあるよ！



ふゆめがっしょうだん
（福音館書店）
写真：冨成 忠夫・茂木 透　文：長 新太
★かわいい冬芽がいっぱいの楽しい
絵本です。親子で読むのもオススメ！



北海道樹木図鑑
（亜璃西社）
佐藤 孝夫著
★北海道に自生する樹木図鑑ならこれです！
冬芽で木を検索できます。

話題提供／自然ウォッチングセンター（https://shizen-w.org/）　イラスト／こぐれけいすけ

～クマと私たちの間に～

森づくりをする私たちはヒグマとどう付き合えばいいのか

写真提供（ヒグマ写真）：山本 牧



近年、日本中でクマによる被害が多発するようになりました。
それはなぜなのか。クマが変わったのか、人が変わったのか、
それとも別の理由なのか。

クマが出るならその対処をすることは必要です。
でも、それだけでいいのでしょうか。
私たちが本当に知っておかなければならないことはないのか、
忘れてしまったことはないのか。

「森づくりの現場」という場をクマと共有する私たちだからこそ、
考えたい「クマ」と「人」の距離感のこと。

森に行く前に

森はクマの生息地。そこに足を踏み入れる時、
私たちはどんな「準備」をしておくべきなのでしょう。

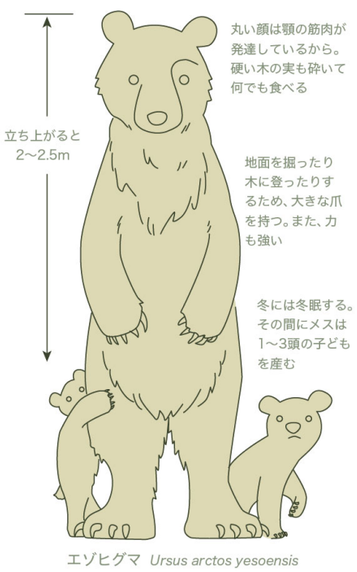
クマは怖い？ どれほど私たちは クマのことを知っているかな？

2025年は衝撃的な年になりました。全国でクマによる被害が相次ぎ、13名の死亡を含む、200名以上が被害に遭いました※。中には北海道の2名の死亡事故も含まれています。それを受けて、「クマが怖いから北海道には行けなくなった」「山にはクマがいるから行かない」「キャンプに行きたいけどクマが怖いしなあ」そんな声があちこちから聞こえてくるようになりました。本当にクマはそんなに怖い生き物なのでしょうか。

森づくりに関わる私たちは頻繁にクマの生息地である山間部に出入りしています。森が活動の舞台である以上、その「怖いクマ」と向き合うことは避けられない話です。

今回は、そんなクマ（ヒグマ）について、なぜ怖いのか、どんな付き合い方をするべきなのかを専門家に話を聞きつつ、深掘りしてみたいと思います。

まず、クマがどんな生き物なのかをおさらいしましょう。北海道では最大の哺乳類です。最大500kgを超える巨体で力が強く、用心深く臆病で、そのくせ好奇心旺盛で学習能力・適応能力に優れています。食肉目（ネコ目）クマ科に属し、その分類の通り、肉食動物が元ですが実際には植物を主に、機会があれば肉も食べるスタイルの菜食中心の雑食性です。なわばりは持たず、ホームレンジと呼ばれるお気に入りの場所を中心に暮らしています。



エゾヒグマ *Ursus arctos yesoensis*

ここで注目したいのがその食べ物。高い学習能力を活かし、季節や場所を覚えて多彩なメニューを食べ分けています。これは人間と一緒。つまり、クマとヒトは食べ物において競合状態にあり、それが人類史上現在まで続くクマとヒトの軋轢の大元となっています。例えば北海道では狩猟採取を基本として生活するアイヌの人々とは、サケをめぐった競争があったと考えられますし、また、明治期に入り、和人たちが農耕による農作物や家畜の導入を進めたことにより、ヒグマと人間の競合はさらに大きくなり、軋轢は増していったのです。

ヒグマの問題は 人間社会の問題？

ヒグマはモメごとは嫌いなので、人がいると避けたり隠れたりしてやりすごします。ただし、「人間は美味しいものをもっている」と学習したクマは別。開拓以降、クマにとっての美味しいものを大量に生み出してきた人間たち。それでも狩猟や駆除によってクマを山奥に押し込めたり、里山を人間がうろつくことで距離を保っていました。


トレイルカメラに写った林道を歩くヒグマ。
木に描かれた白い線はヒグマの大きさを測るためのもの

しかし近年、日本中で地方の農山村が衰退して人口が激減し、中山間地から人が減ってしまったことでクマは里地に近づくようになりました。里には畑や果樹の美味しい作物があり、しかも人がいない。クマが「学習」して人里近くに居付き、さらにそれを親から教わった新世代のクマたちが育ち、今のクマ問題につながりました。クマが人を避けない、怖がらなくなったために事故が増えたという問題には、そうした人間社会の構造的な問題が背景にあることも知っておかねばなりません。それを差し置いて「出没したら駆除する」という対策を続けても根本的な解決までは見込めないのです。

森を育て、生態系を支える 大切な動物でもある？

一方でクマは生態系を支える重要な動物であり、大切な森づくりの役割を担っているともいわれています。つまり、森づくりをする私たちの大切な仲間というわけです。

生態系の中でのクマの役割については、遡上してきたサケマス類を捕食することで海の栄養を山に運び、海と森をつないでいることや、木々の実を食べることで種子の拡散に貢献していることなどが分かってきました。しかしこれらはまだまだ研究の途上で、生態系の中でクマがどれほどの重要な役割を担っているのか、森づくりにどれほどの影響があるのかについては情報不足であり、今後の研究が期待される分野といえます。

クマが森づくりにとって大切な存在だということは、可能性としてはそうかもしれませんし、それを期待することも人情です。しかし科学的にはまだまだわからないことの方が多い話です。自然の生態系は複雑怪奇で私たちが把握できていることはごくわずか。この複雑で紐解くことが困難な生態系のつながりについて都合よく単純化しようとせず、その複雑さを理解した上でしっかりと距離を取って冷静に見ること、その上でクマとの付き合い方を考えることも、私たち人間にはとても大切なことです。


クマが海と森の物質循環をつなぎ、木々の種を広範囲に蒔いていることが少しずつ分かってきた

※2025年度の速報値。環境省HPより https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/effort12.html（2026年9月3日閲覧）

森づくりをする私たちが
心掛けるのは

ヒグマのことを学び、出合わないように行動すること。

ヒグマについてまずはよく知ること。とはいえ十分な知識を得られているのか分からないまま森にでかけるのはちょっと不安。そこで、森にでかけるためにどんな心構えをしたらいいのか、具体的なことを少しだけ紹介します。

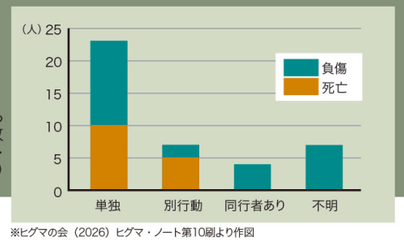


● 存在を知らせること

ヒグマは用心深い動物です。音で人間の存在を察知すれば、争いごとを避けるためにクマの方から接触を避けてくれます。

● 一人にならないこと

ヒグマによる**人身事故のほとんどは周囲に誰もいない、一人になった時**に起こっています。その理由はさまざま考えられますが、これはデータが示す客観的な事実ですので、**「一人にならなければ事故は起きにくい」**というのは信頼できるもっとも簡単なヒグマ対策といえるでしょう。森づくりの作業中には夢中になって一人になってしまうこともあるかもしれません。そのような状況をつくらないように、メンバー同士で注意しあってください。



ヒグマによる事故と行動人数（1989〜2019年・ハンターを除く）

※ヒグマの会（2026）ヒグマ・ノート第10刷より作図

● 食料には特に気をつけて！

ヒグマは嗅覚が鋭く、好奇心が強く、学習能力が高い動物です。**「人間がおいしいものを持っている」と学習させてしまえば途端に恐ろしいクマが生まれる**ことになります。そうさせないために、食べ物や匂いには特に注意しましょう。**匂いの強い料理は避ける、お弁当などの食べ物は密閉して車の中に保管する**ほか、香水などの香りにも気をつける必要があるでしょう。



食べ物は匂いが漏れないように、クマの手が届かないように注意を



● クマがいたらどうする？

ヒグマは基本的には人間を避ける動物です。無用な争いはしたくないことがほとんど。もしもヒグマと遭遇してしまったら、**近くにいる人同士で集まって、ゆっくり離れましょう。**パニックになって走って逃げてしまうと危険です。あくまでも冷静を保って。

話してくれた人



北海道立総合研究機構フェロー
ヒグマの会 副会長
間野 勉さん

ヒグマの生物学と保護管理に関する研究者として、北海道のヒグマ研究を第一線で牽引してきた。北大ヒグマ研究会出身。農学博士。



NPO法人もりねっと北海道 代表理事
ヒグマの会 副会長、森づくりコーディネーター
山本 牧さん

森づくりの専門家としてコープ「Fの森」の森づくりをコーディネートする一方、ヒグマの保護管理にも深く関わる。専門は森林動物学。最近の著書に「クマに出遭ってしまったら？」山崎晃司 編著・PHP研究所（共著）



ヒグマによる事故、実は回避できたかもしれない？

先に書いた通り、ヒグマは無闇に人を襲って食べたりする動物ではありません。どちらかというと、人を避けたり会わないように隠れたりする、臆病な動物と考えて差し支えありません。

しかし現実には襲われる人がいます。そのケースを見てみると、出会い頭にびっくりして襲ってしまったり、母グマが子グマを守るために攻撃に出たりすることがあるようです。特に近年ではトレイルランニングをする人も増え、ヒグマの予測する以上に早く接近する人とばったり遭遇してしまうケースのヒグマによる事故も懸念されます。

また、最も深刻なのは人間が怖くない、あるいはさらに進んで人間の近くに行くと美味しいものがある、と学習したクマで、こうしたクマは人里での事故を起こす確率が高くなることが予想されます。

これらの事例は、実はクマの生態をしっかり知っていれば避けることができるものも多くあります。つまり、クマのことを学べば回避できるリスク、という言い方もできるのです。



クマとの付き合いは車との付き合いにも似ている。交通ルールを守るように、クマとのルールを守れば事故は少なくなる。
コントロールできるリスクとしてとらえることが必要

ヒグマの対策は誰かがやってくれるから関係ない？

「知れば回避できる事故」ならば学ぶ価値はあるのではないでしょうか。

ヒグマの専門家たちはよく交通ルールを引き合いに出して説明します。車は非常に危険なものですが、交通ルールという決まりにしたがって運用されています。そのルールを知っていれば、交通事故の発生を抑えられる、というわけです。

ヒグマにも知っておくべき習性があり、森に入るにあたってのルールがあります。そのことを知らずに森に入るのは、交通ルールを学ばずに道路を横断するのと同じ、というわけです。信号の意味がわからずに道路を渡ろうとすれば轢かれてしまいます。同じように、キャンプで匂いの強い料理をすればヒグマを誘引してしまうことになります。

このようにヒグマがどんな動物なのか、どんなルールを守れば事故を減らせるのか、ということは積極的に学ぶことが必要ですし、知れば事故は減るのです。しかし、その機会は十分とは到底いえません。日本のクマ対策といえば、人里に出てきたクマをほぼ機械的に駆除することが主流なのが現状で、この業務を担うのは猟友会のボランティア（ガバメント・ハンターもようやく取り入れられ始めましたが）のことがほとんどです。それはクマの生息地に暮らす多くの市民にとっては「誰かがやってくれること」に過ぎない場合が多く、それゆえに自分ごととして捉えられずに人任せにしてしまう。

ところが、クマが日本中のどこの市街地にでも出没するようになった昨今、誰もがクマを知り、それぞれがルールを頭に入れて生活を送る必要が出てきました。決して他人事ではなく、誰かが解決してくれることでもなく、自分ごととして、自分で対策をしなければいけない局面に、今の日本は踏み入れているといえるのです。

「知らない」から怖い。「知っていれば」怖くない？

札幌市のヒグマがたびたび出没する地域では、一部の町内会が対策に乗り出しました。専門家を招いてヒグマの学習会を開き、草刈りをして見通しをよくすることでヒグマが身を隠せる場所を無くし、ヒグマがゴミを漁れない設計のゴミステーションを導入する。また、出没した時の詳細な情報を速やかに地域住民に共有するなど、本腰を入れた対策です。こうした対策をすることは、住民の漠然とした不安の解消につながるといいます。相手の姿がよく見えてくることによって不安が解消され、怖いものではなくなっていくというのです。このことは逆に、相手を知らないからこそ、不安や恐怖が生まれるともいえるのではないでしょうか。「クマが怖いから北海道に行くのはやめよう」「クマが心配だからキャンプも野外イベントも中止」。こうした理由のはっきりしないクマに対する恐怖は、ただ単に私たちの「知らない」ことから来る怯えなのかもしれません。ヒグマをよく知ることは、森に出入りする私たちにとっては必須のことであり、漠然とした不安や恐怖を遠ざけて安心して森づくり作業を行うための手段のひとつかもしれません。



ヒグマの足跡をたどる体験（2025年の「Fの森フェスティバル」にて）。ヒグマについて知り、学ぶ機会を増やす

ヒグマは北海道の自然を象徴する魅力的な動物です。人類史的に見ても、有史以前からクマは畏怖や尊敬の対象でもあり、森の隣人でもあり、愛すべきキャラクターでもあり続けています。一方で食べ物をめぐる競合相手でもあるために場合によっては襲われることや農畜産物を奪われることもあり、住むエリアを人間と共有するにはとても難しい相手です。特に、森という舞台で共に活動している森づくりに関わる私たちにとっては、真剣に向き合わなければならない対象です。近づき過ぎず、遠ざけ過ぎず、お互いが少し敬遠するくらいの程よい距離感と森の隣人としてリスペクトをもって居られるよう、まずは私たち人間側がしっかりとクマについて学ぶことが出発点なのです。

あすもりの森づくりが目指す、多様で豊かな「開拓以前の森」。そのビジョンには、人間もヒグマも共に森の恵みの中で生きる姿が描き込まれているはずです。共に未来を分かち合う相手といかにして生きていくか。私たちはこの問題に真摯に向き合い、考えていかなければなりません。

● ヒグマ撃退スプレーを準備する

いよいよ危なくなったらクマスプレーの出番です。クマスプレーは、実際に襲われそうになった場合には**もっとも効果が期待できるクマの撃退方法**ですが、時宜を得て正しく使わないと効果を発揮しません。事前の知識に加えて使用するための練習もしておくことが大切です。



● ヒグマはケースバイケース

ヒグマは非常に個性豊かな動物なので同じ対策がどんな場合でも通用することはありませんし、ヒグマに遭遇する環境やシチュエーションも千差万別です。ですので、その時の状況を冷静に判断して何ができるのかを考え、実行することが求められるのです。残念ながらいくつかの有効な対策はあっても、**ヒグマに関して「確実な対策」というものは存在しません。**それだけに、ヒグマについて十分に学ぶことが重要なのです。



ヒグマの外見は月の輪があったり黒毛や金毛がいたりと個性豊か。同じように性格もそれぞれ全くちがうため、出合った時の対応も違ってくる

● ヒグマについて学習する

何よりも**人間側がヒグマのことをしっかり理解すること**が必要です。どんな動物なのかを知り、事故を避けるためのルールを知る。そうすれば**ヒグマは無闇に怖い動物ではない**ことが理解できますし、事故に遭わないために何をすればいいのかもわかります。無闇におそれないことは共に生きるための最初の一歩です。官民で、あるいは町内会などでヒグマの講習会などの機会が増えています。ぜひ参加して、ヒグマに対する理解を深めてみてください。



● ヒグマのことを知るために

この紙面で紹介したヒグマのことはごく一部です。ヒグマについては多くの書籍がありますし、モリイクでも過去に取り上げていますので、より深く学ぶためにぜひ参照してください。



こちらから閲覧&ダウンロードできます

別冊モリイク
「はなれることは守ること」



モリイク vol.23
「野生動物との距離を考える」



ヒグマ・ノート

ヒグマの研究者の団体「ヒグマの会」が発行する冊子。ヒグマの生態から被害と対策、人との共生まで、読みやすくまとめてあります。ヒグマの会のホームページから購入できます（A5判 31ページ）。

ヒグマの会 https://www.higumanokai.org/

植える→育てる→使うことで保たれる森林。
木を使うことも、森を守ることにつながっている。
木づかい Column

北限の漆を塗る 野つけうるし



木地は道内・道外の職人によるシラカバ、ケヤキ、サクラなど。漆は下地～中塗りには中国産を使用するが、仕上げには網走産を含む国産の漆をのべ7回以上塗り重ね、美しい深みのある色合いを生み出す。作品は道内ほか、各所で販売している

本来、生息していないはずのウルシの木が網走で見つかった。調べてみると、江戸時代に漆を生産して産業を興せないかと植栽を試みたものがわずかに生き残り、現在まで子孫をつないできたようだ。この発見がきっかけとなって生まれたのが「網走うるしの会」。以来、網走は漆掻(うるしか)きをする日本北限の地となっています。そのウルシにまつわる数奇な運命を辿って北見市で漆職人をしているのが「野つけうるし」の菅原咲さん。

帯広出身の菅原さんが漆と出合ったのは山形県の美術系大学に通っていた時のこと。漆掻きのワークショップに参加して立木のウルシから樹液を掻き取って採取する体験が強烈に印象に残ったといいます。また、力も要らず静かに取り組める漆は自分に合っていると感じ、卒業後に岩手県の安代町（現八幡平市）で2年間みっちり修業しました。

その後北見に工房を立ち上げたことについては地縁があったことのほか、自分が生まれ育ち、しっかり馴染んでいることが理由だと話します。漆器は全国各地にその土地に合った発達をしている、食文化に深く結びついた生活道具です。だから、その土地の文化的背景を持っていることが大切だったとのこと。また、北限の漆の産地の近くであり、「網走うるしの会」があったことも大きかったそう。現在は会の事務局をしながら、ウルシを植えた場所の管理や漆掻きも行い、作品にも網走の漆を使うなど、北限の漆に関わる活動も続けています。

「漆の魅力は、歴史の深さと使う魅力です」と語る菅原さん。歴史的に漆は縄文時代にはすでに使われていたことが分かっています。しかも技術体系は今とあまり変わっていません。「発掘・復元したものの多くは漆が胎（素地）をしっかりと保護して残っている。その強さと歴史のロマンが漆の魅力です」。

また、漆器は人肌のぬくもりというところが道具としての魅力。「熱くも冷たくもない。人肌で体の延長のような器って、金属にも陶器にもないのです」と、漆の魅力について話してくれました。

今後は、「自分の作品を使う人が少しずつ増えていって、そのうち塗り直しの依頼が来るようになったらいいな」といいます。漆器は生活の道具として長く使ってもらえればうれしい。そのことを塗り直しで確認できる。それはきっと職人冥利に尽きる話に違いありません。

そして地域の食文化に根差した器をつくること。「うちには玉ねぎが年中あるんです。北見という土地柄（笑）。だから玉ねぎを使った煮込みやスープを作ることが多くて、スープの器を作りたいと思っています」と、器としての本質を見失わない姿勢を話します。「漆器って、無名性が高いんです。作者の名前は残りにくい。だけど器とそれに施した塗りの技術は残る。だから自分が塗った器を本当は作品とも呼びたくない、あくまでもその土地の暮らしの道具として使われる、そういう仕事をしていきたいです」。さらに、子ども用の食器なども作って幼い頃から漆器に触れる機会をつくり、北海道にも漆の文化を育てていきたいと、この先の夢を聞かせてくれました。

ご存知の通り漆は木から採れる天然樹脂で、そこからすぐれた文化が生まれました。それは森の恵みといえますが、北海道ではいまだに馴染みが薄いかもしれません。でも漆が辿った数奇な運命は今の北海道に確かに受け継がれているのです。そしてこの文化が加わることで、私たちの食文化はひとつ豊かになることでしょう。みなさんも、この森の恵みを手にとってみてはいかがでしょう。

https://www.notsukeurushi.com/home　https://www.instagram.com/notsukeurushi/

Column 植樹の図鑑 知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

大きな木の小さな物語

㉖カラマツ



カラマツは高さが30mほどにもなる落葉針葉樹です。本州では亜高山帯に生育する先駆性樹種で、富士山・浅間山・八ヶ岳などの火山の麓が主な自生地です。北海道には明治初期に長野県から持ち込まれて植栽され、明治中頃から道内各地で主要な造林樹種のひとつとして植えられてきました。

カラマツ造林のピークは1954年。1年間に3万3千ヘクタールも植えられました。黒松内町ほどの広さです。第2次世界大戦前後に乱伐して荒廃した森林を復旧することや当時主産業だった炭鉱に坑木を供給することが目的です。成長が速いことが樹種選定理由のひとつでした。アカエゾマツは高さ10mになるのに25年程度かかるのに対し、カラマツは15年弱で達するのです。坑木などは20年も経たずに収穫できます。植えた本人が資金を回収できるというのは魅力的で、当時は「カラマツ植えて、ハワイに行こう」なんてキャンペーンもあったそうです。残念ながらちょうどいい大きさになったときには炭鉱がなくなってしまいましたが…。

ただカラマツは野ネズミに食べられやすい、先枯れ病という病害に侵される、材がねじれて使いにくいなどの欠点もあります。成長が速いからといってよいことばかりではありませんでした。

夏も終わるころ、「ラクヨウが…」と聞いたことありませんか？ そう、それはナメコを大きくしたようなヌメリのあるカサを開いた「ハナイグチ」というキノコ。味噌汁や大根おろしと一緒に、ですね。ラクヨウはハナイグチの別名。カラマツ（落葉松）林にしか生えません。なので「ラクヨウ」。本州からカラマツを持ち込んだ際に苗木に付着してきたものだろうと推測されています。

カラマツは、北海道の落葉樹の中で最も遅い時期に黄葉します。カラマツの葉が落ちるとすぐに雪の季節。最後の秋の輝き、今年はどんな姿を見せてくれるのでしょうか。

text/images 孫田 敏
‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門：建設環境）。
著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理―その理論・技術と実践―：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）
WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp



参考文献
佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜璃西社　北海道立林業試験場 監修,2006,北海道 樹木の病気・虫害・獣害 ポケット図鑑,217pp,北海道森と緑の会
清水建美,1996,カラマツ,週刊朝日百科　植物の世界128,11-243～245,朝日新聞社　北海道立林業試験場,2007,カラマツ人工林施業の手引き,91pp, 北海道立林業試験場
坂東忠明,2013,カラマツの来た道 ～北海道カラマツ100年の歩み～,213pp,エコ・ネットワーク　五十嵐恒夫,2006,北海道のキノコ,375,pp,北海道新聞社
北海道立林業試験場,2018,アカエゾマツ人工林施業の手引き,100pp, 北海道立林業試験場

ほっかいどう 森のイキモノ SOS

花の季節、庭にくるハチが減っていること、気づいていますか？
夏の夜、灯りに集まる虫も少なくなっています。
虫がキライ、虫は少ない方がいい、という人もいますが、
虫のいない世界、それが、豊かな地球なのでしょうか。
世界中で昆虫が激減している、
それはどうしてなの？ **虫が減ると地球はどうなるの？**
それが今回のテーマです。

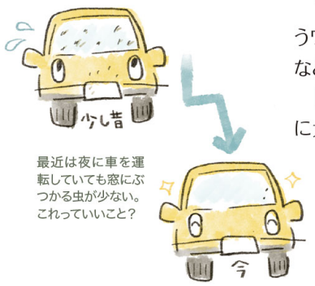
その5

虫たちはどこに行くの？

写真提供：堀 繁久



虫が減っています。
世界中で、北海道でも。



1989～2016年、ドイツの自然保護区でマレーズトラップというワナを使った調査が行われました。この間で、ハエ、チョウ、ガなどの飛ぶ昆虫が、なんと**76%も減少**していました。

「昆虫が減った」ことが実際に数字で確認されたことは世界中に大きなショックをもたらしました。飛ぶ昆虫だけではなく、地面や土の中、水中にいる虫も激減していると思われます。**昆虫は生態系（生物のつながり）の土台となる大切なないのち。**

虫たちの急激な減少、これは**私たちの暮らしにつながる重大な環境問題**なのです。

消えていく虫たち

「北海道レッドデータブック」を見てみましょう。→

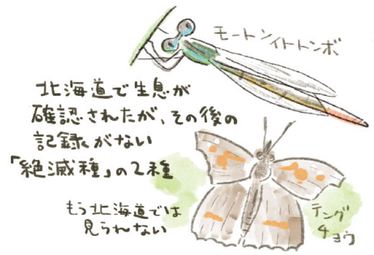
絶滅が心配される虫は数多くいますし、すでに見られなくなったものもいます。



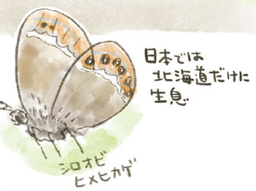
草原性のチョウ。
石狩低地帯では十数年前にほぼ絶滅。
道東の一部の草原でわずかに生き残っている



危急種・絶滅危惧Ⅱ類。
砂地に落ちた牛の糞に集まる糞虫でしたが…ここ20年くらい生息確認ができません







「シロオビヒメヒカゲ」の「札幌周辺亜種」は生息地が札幌のごく一部の崖地に限られ、生息数も少なくなった「絶滅危機種」です。水生昆虫の「タガメ」も、北海道では「絶滅危機種」、全国的にも減少傾向です。「モートンイトトンボ」と「テングチョウ」の2種は、以前北海道で生息していたけれど、その後の記録がありません。

消える草原と砂丘



自然の移り変わりの一つの段階が**草原**です。山火事や洪水の後の荒地に風や鳥が種を運び「草原」が生まれ、やがて昆虫など草地を好む生き物が息づきます。しかし、今は土地が「畑」や「住宅地」など人の暮らしに合わせて利用されるため、**自然の原っぱ（草原）が少なくなっています。**街の空き地は原っぱに見えますが、そこに生える植物はほとんど外来種。在来の昆虫が好む在来の植物が広がる草地ではないのです。

海岸の草原も、海の近くの放牧地が改良されたり、砂の採取で砂丘がなくなって、草原を好む生き物が減少しています。

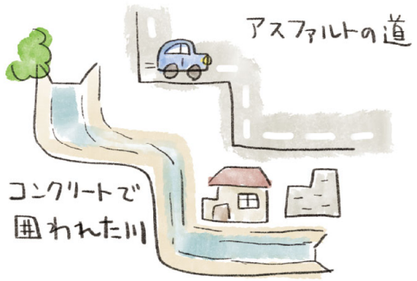
虫はどうして減っているの？

SOS!! 1. 農薬を使うこと



農薬、肥料、殺虫剤などによる汚染が昆虫に大きな影響を与えています。「ミツバチ大量死」は、神経系や脳を狂わせて方向感覚を失わせるネオニコチノイド系の農薬が原因のひとつとされています。また、虫の体に残った成分を他の動物が食べることで起きる影響も心配です。

SOS!! 2. 生息地が無くなる



森林、草原、湿地などを**「暮らしの便利」ために改変してきた**私たち。道路を舗装し、海岸や川をコンクリートで固めたことで、虫たちの生息を難しくしています。一方、人がいなくなって荒れた里山や田畑、過密で暗い植林地なども虫たちの多様性を減らしています。

SOS!! 3. 気候が変わった





気候変動（地球温暖化）は、世界で8,700種以上の絶滅危惧種に影響を与えています。暑さが苦手な高山性の昆虫の生息地が消える。植物の開花が早まり、昆虫の活動時期とズレてエサ不足に。豪雨や干ばつの被害も。

温暖化の影響で、本州より南に生息していたチョウトンボが北海道で見られたり、北海道南部にしかいなかったオオカマキリが道央圏で暮らせるようになったという報告もあります。また、人の手で道外から移入されたカブトムシやゲンジボタルも生息するようになりました。こうした生き物たちが**もともと住んでいる在来の生き物に新しい病気を持ち込んだり、エサや居場所を奪ってしまう**こともあります。



想像してみよう 虫のいない世界



虫は鳥や魚、獣たちの食べ物となり、草花や農作物の受粉を助け、豊かな土を作り、害虫を抑制します。**虫がいなければ実がならず種ができず、**絶滅する生き物も多いでしょう。その時、**私たちの暮らしはどう変わる**のか？

今、多数の虫が絶滅しても、何万年か後には新しい生物による新しい生態系が作られているでしょう。しかし、それは遠い未来のこと。このまま昆虫が減ると、私たちは子どもたちや次の世代に、**多様性や豊かさを失った地球を、自然からの恩恵のない未来**を、手渡すことになります。

今の**「便利な暮らし」**はすべての生き物、私たちに安全かな？「農薬、殺虫剤、化学物質をなるべく使わない食品や生活用品を選ぶ、生き物にやさしい暮らしをする」。今、私たちができることはたくさんあります。

地球上で最も種類数の多い分類群、昆虫。それゆえ半世紀以上北海道の昆虫を調べ続けているが、まだまだ分からないことばかり。石狩川下流の湿原など、発見する前に絶滅してしまった昆虫は多いと思う。高速道路を車で走っていてフロントガラスにぶつかる昆虫が少なくなったことや花に集まるハナカミキリの姿がめっきり少なくなたことを危惧している。春にフィリピンに昆虫調査に入ったが、熱帯でカブトムシやクワガタをほとんど見られなかったのは初めて。昆虫の減少は世界規模で進んでいるのかも!?



お話を聞いた人

堀 繁久（ほり しげひさ）

北海道博物館学芸員（昆虫）

1961年札幌市生まれ。南の昆虫に憧れ、琉球大学理学部生物学科へ入る。そこで頭の中の昆虫が全て琉球の昆虫に入れ替わったが、北海道へUターンしたので、頭の中は再び北の昆虫に上書きを継続中。北海道及び周辺域の昆虫の調査研究をライフワークとして続けている。現在は北海道博物館学芸員。来年からフリーになるので、子どもたちに昆虫の面白さを伝える活動を増やして行こうと思う♪

北海道博物館HP https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/

ミニコラム ダイコクコガネは生き残れるのか？



ダイコクコガネは大型の草食動物の糞を餌とする、草原に棲むコガネムシ。北海道ではエゾシカの糞を餌にして暮らしていましたが、明治期にシカが減り、人が持ち込んだ牛や馬の糞を食べて生き残りました。しかし、家畜の駆虫薬イベルメクチンの影響で急速に減少。近年増えてきたエゾシカが採草地や牧場で落とす糞を食べて生きながらえています。彼らは生き残り、種を存続させていけるのでしょうか？

morinoko factory



新岡薫／エトプン社、モリノコ商会
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いている、札幌出身のイラストレーター。森と湿地、動物園、水族館、博物館の散策を好む。虫たちの減少に危機感を感じる昨今。なによりこんなに多様で面白い姿の生き物が見られなくなるのは嫌だなあ。
https://etobunsha.com



宮本尚／モリノコ商会
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。環境保全やヒグマ対策の仕事をしながら、歌をつくって演奏するシンガーソングライター。宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで歌っています。
https://naoeaster.wordpress.com

生物多様性の森　―虫のきもち

私たちの森では、今年も変わりなく季節はめぐり、自然の営みが繰り返されている。私たち夫婦をはじめ森を愛する人たちが集い、森の手入れをしたり、遊んだり憩ったり。再び冬が訪れて降り積もる雪が森を本来の主人の手にゆだねるまで、私たちと森は相思相愛のパートナーだ。

思い返してみるとこの森と出会ってからもう、20年が経ってしまった。誰の制約も受けずに独自の方法で森づくりをしたい、というのが夫がこの森を購入した動機だった。重機もなにもなく、シンプルな道具と非力な妻を含むたった二人の人力だけだったが、それでも今より20年分若かったので、何とかなると信じて蔓延(はびこ)るササや雑草に立ち向かった。

失敗もあった。木がネズミやウサギに齧られて枯れてしまったり、下草を刈りすぎて、芽吹いたばかりの幼木を夏の直射日光に当ててしまい枯らせてしまったり。

それでも今、森のいつもの広場に立って見渡し「ああ、いい感じだなあ」と、しみじみ思う。木々は成長し、あるいは弱って来た木の下に、世代交代のための次の樹種が育っている。柔らかい下草が風にそよぎ、鳥や虫たちの声が高く低く絡み合う。梢を揺らす風が木の葉を鳴らして通り抜けていく。四月のなごり雪に獣たちの足跡を探すのも楽しい。クイズのゲームのように当てっこしたり、行先をたどったり。

そんな場面も、もう私たち二人きりではない。幾人もの森を愛する仲間がいて、もう夫婦だけで森に行くことはなくなった。草を刈る時も、ロケットストーブで鍋を囲む時も、いつも誰かの笑顔がある。そんな、みんなのものになった森を、これからどうしていったらいいのだろうか。

私たちの森は様々な偶然で出来上がっている。『広場』と呼んでいる憩いの場所は、4〜50年前は畑だったそうだ。そこにシラカバの木が自生して、明るく美しい林を作った。小川のそばにある湿地も、もとは田んぼだった。川の流れを変えて土地を確保し、湧き水を引き込んで水田にしていた。放棄された田んぼに、今はエゾサンショウウオやニホンザリガニ、ヘイケボタルやその餌となるモノアラガイなどが住んでいる。

それ以外にも様々なフィールドがあり、故意に刈り残したササ藪にウグイスらしい鳥の巣を見つけたり、クマゲラに穴だらけにされたニレの木に樹液を舐めにきたクワガタムシやコガネムシ、カブトムシなどの虫たちがびっしりと付いていて、縄張り争いを繰り広げていたりする。

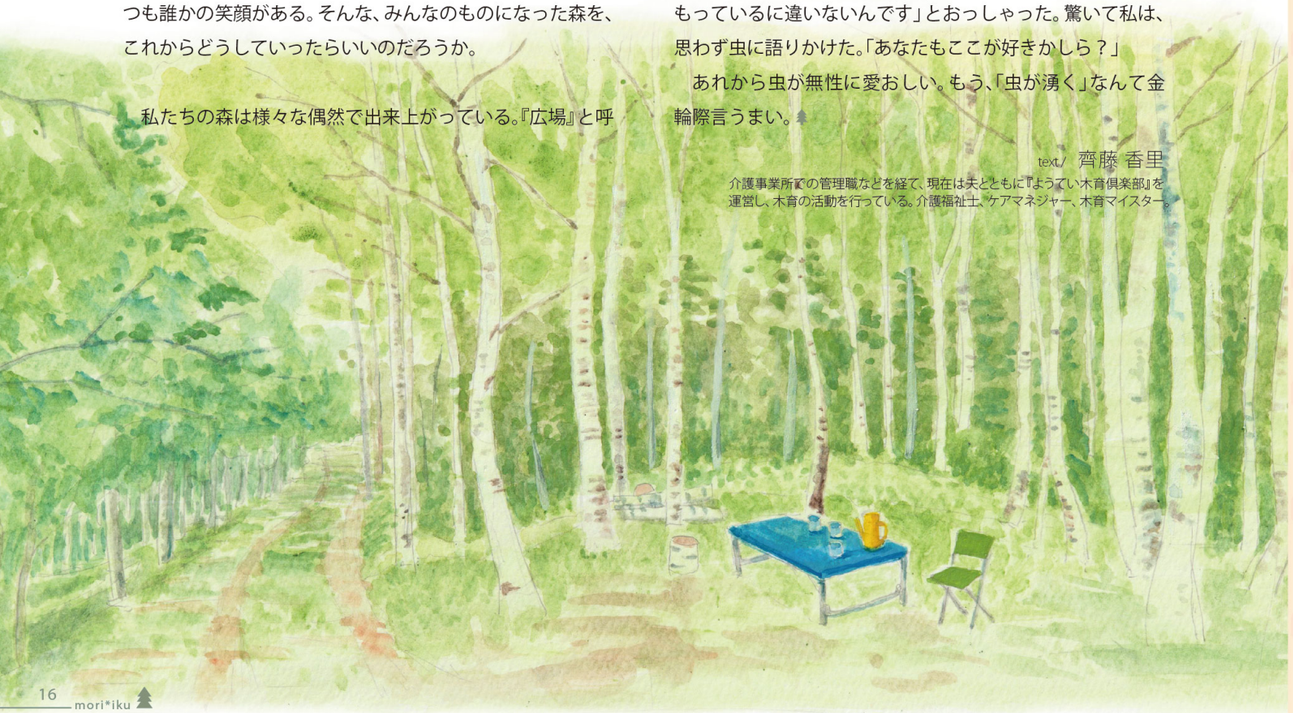
木々ばかりがこの森の主ではない。木に絡みついて幹を折ってしまうやっかいもののツル植物も小鳥や小動物のためというだけではなく、それ自体も多様な生物が共存する世界の、大切な一員であることを知らねばならない。前述、下草を「蔓延る」などと表現した私は恥じるべきであろう。

私たちの森をこれからどうしていくか。その答えはもう出ている。多様で豊かないのちの森を作り、見守り、保全していく。たくさんの人たちの手と心で。

『自然共生サイト』に登録を模索している。サポートのために森に来て下さった環境省の方が手元に這い上がって来た小さな虫を見て、「やあ、この虫は何でここに来たんでしょうね。ミネラルを摂りに来たか。いずれにしろ何かの意思をもっているに違いないんです」とおっしゃった。驚いて私は、思わず虫に語りかけた。「あなたもここが好きかしら？」

あれから虫が無性に愛おしい。もう、「虫が湧く」なんて金輪際言うまい。

text/ 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。



Fの森通信

2026年 Fの森 森づくり会

森の様子を見ながら変わる森づくり。今年は「補植」を行いました。

今年の「Fの森」の森づくり会が行われた日、2026年の5月31日は絵に描いたような五月晴れ、とても気持ちの良い風が吹き抜ける会場にはおよそ100名の参加者が集まりました。

森づくり会は毎年少しずつ形を変えています。というのは、植樹をするだけが森づくりではないから。今までも草取りなどの育樹作業は行ってきましたが、今年は今までの植樹地でも育ちの悪い場所に苗を追加して植える作業、いわゆる「補植」を行います。2017年と2020年に植樹した場所は生き残った苗が特に少なく、今回はこの植樹地での補植となりました。前回の反省を生かして、その場所により合った樹種であるタニウツギやハルニレなどを植えたのですが、それらの苗は昨年にコープさっぽろの職員研修として、職員のみなさんが苗立てをしてポットに移植した苗が一部使われたのでした。

午後はグループに分かれ、「Fの森」ガイドウォークと、道民の森の森林学習センターでの木工を楽しみます。ガイドウォークは2013年の最初の植樹地である「エリア21」で13年前に植えた木々がどう育っているのかを見てまわり、自然に生えてきたシラカンバの近くに植えられた木は成長がよいことなど、森の様子についてガイドが行われました。

また、木工グループは森林学習センターのスタッフから手ほどきを受けて表札づくりにチャレンジです。木の板に木の実や枝などの素材を使って、自分の名前など思い思いに描いていきます。中には大好きな「縄文」という文字を作る子がいたり、お父さんが子どものために「勉強中」という札を作ったりするなど、木に触れる時間を楽しんでいました。

森の様子を見ながら少しずつ変化する森づくり会。来年は「Fの森」がどんな様子になっているのか、今から楽しみです。





植える木はカツラ、オヒョウニレ、トドマツ、タニウツギ。以前植樹した木が定着できなかった下の写真のような場所に補植する





ガイドウォークでオニグルミの花を観察する



室内での木工で表札などをつくる



定番のイタドリ笛も





苗立て　あすもり実地研修会 @コープさっぽろ本部

6月30日、昨年に続いてコープさっぽろ本部の玄関で職員さんを対象に、あすもりのことを知ってもらい、森づくりに少しでも関わってもらえる機会をつくる目的で実地研修が行われました。今年は3年目くらいのトドマツ、オヒョウニレ、ヤチダモ、ウダイカンバの4種類の苗が準備され、参加した職員さんは次々とポットに苗を植え付けていました。

参加したみなさんは、普段あまり土に触れないという人も多く、互いに楽しくしゃべり、交流を深めながら土や木の芽の感触を楽しんでいました。植え付けた苗を「かわいい。このまま育てたい」などという感想も聞かれました。また、興味深そうに覗きに来た近所の方がいたことも印象的でした。

これらの苗は「Fの森」の森づくり会などで、来年以降の補植作業に使われる予定です。

Event Report

各地の森づくり会から

釧路地区 白糠丘陵に森を育てる 未来の森植樹祭

with 北海道・白糠町・くしろ西森林組合

6月6日、もう初夏に入ったといえる季節なのに全道的にとても寒い一日。時折雨が降り、吐く息も白く空に溶けていくような天気ですが、一般参加の20名を含む、のべ40人ほどが、白糠町の森の中に集まりました。この日は17回目となる釧路地区委員会の植樹会。白糠町との協定による植樹祭は2022年に一度終了しましたが、新たに2023年から5年間の協定を結んで再開され、今年は320本のトドマツを植えます。

見本となる森林組合の職員の方によるデモンストレーションを見て、各々スコップを持って植樹スタート。しかし草に覆われた地面は固く、スコップがなかなか通りません。それでも参加者のみなさんは穴を掘っては一本一本トドマツの苗を植えて行ったのでした。

植樹の後は現地でお弁当を食べ、白糠町役場の庶路支所にて木工体験教室が行われて、木々に触れる一日となりました。



今後も釧路地区の植樹は続いていきます。来年は広葉樹を植樹しますよ。

コープさっぽろ釧路地区本部 藤田 清彦さん

旭川地区 鷹栖町・コープさっぽろ 協定植樹祭

with 鷹栖町・鷹栖町森林組合

9月13日は秋晴れの一日。鷹栖町のパレットヒルズキャンプ場の一角、大雪山を望む斜面で行われたのは旭川地区委員会の植樹祭です。以前は別の場所で行っていた植樹ですが、普段はゲートがあってアクセスが難しいからと、鷹栖町森林組合に相談してこの場所を見つけてもらったとのこと。ここで行われるのは今年で3回目。植える樹がトドマツ450本なのは、この場所の土壌に合わせたチョイスなのだとか。参加した40名ほどのみなさんは息を切らせて斜面を登り、汗ばみながら植樹をしていました。

昼食の後は焚き火のお楽しみ。マシュマロやソーセージを配られた参加者のみなさんは焚き火であぶっておやつを楽しみました。森づくりに「楽しみ」を入れることも大事にしているとのこと。今年はこの植樹地にカエデなど広葉樹も植えるほか、植樹だけではなく、枝打ちなどの育樹も取り入れて行きたいと、育樹体験も予定しています。



コープの森づくりを知ってほしいこともあって鷹栖町と合同の植樹祭です！

旭川地区委員会 牛久保 真澄さん

Information

次号以降のモリイクについてのお知らせ

いつもモリイクをお読みいただきましてありがとうございます。北海道のさまざまな森づくりや、森と人との関係を紹介するとともに、あすもりの森づくりの取り組みをお伝えする目的で年2回お届けしてきた今までの形式での発行は今回が最後となります。

次号からは年1回の誌面発行へと形を変え、より充実した内容をお届けしてまいります。また、あわせてWeb媒体での情報発信も予定しております。

今後ともモリイクおよびあすもりの活動へのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

Report

コープ未来の森づくり基金 2025年度 活動報告・会計報告

今年度は7か所のコープの森にて312名の組合員さんにご参加いただき、2,880本を植樹しました。森づくり団体等の交流植樹・保育は5回行われ、154名の組合員さんが参加しました。2025年度の植樹会への組合員参加は計466名、総植樹本数は計4,908本（ぎょれんへの助成植樹含む）です。

コープさっぽろ「あすもりフォーラム2025」（オンライン）には、道内の森づくり団体や環境団体、組合員活動委員会などから179名の参加がありました。基調講演として、帯広の森・はぐくーむの日月様にご講演いただきました。また、事例報告として、帯広地区組合員活動委員会の佐藤理事から、市民の森づくり活動への参画に関する取り組み報告がありました。今後とも「あすもり」は一般市民・組合員が参加する森づくりのあり方について学び、考える場づくりを継続して行ってまいります。

森づくり団体への助成として、高額助成2団体、小額助成18団体に380万円を支援しました。また北海道漁業協同組合連合会（ぎょれん）の「お魚殖やす植樹活動」に242.4万円(植樹面積1.31ha、苗木本数2,028本分）を助成しました。

「第16回森づくり団体助成贈呈式」は7会場で開催され、各会場で助成目録の贈呈が行われました。また、「かしわの森とこどもの会」・「NPO法人森のこころね」の活動について発表いただきました。

基金レポート「モリイク」は29・30号を発行し、「あすもりFacebook」もフォロワー数が1,549件（3月20日現在）と推移しています。

2025年度収支一覧

（単位：千円）

	25年度予算	25年度決算	内容
レジ袋積立	21,600	21,196	レジ袋削減の協力積立金
緑の募金	3,856	3,856	緑の募金（当基金配分額）
協賛金	900	746	コープ未来の森づくり協賛金
収入計	26,356	25,793	
植樹森づくり活動	17,800	16,394	植樹・育樹活動、団体交流、ぎょれん植樹
助成金支援	5,000	4,259	森づくり団体への助成
広報・調査・交流企画	3,600	4,141	広報誌、調査研究、その他広報費
支出計	26,400	24,794	

2026年度 北海道のあしたの森を育てる コープ未来の森づくり基金 助成団体一覧

高額助成（活動案件への助成）

- かしわの森とこどもの会 （浦河町）
- NPO法人 森のこころね （苫小牧市）

小額助成（団体への助成）

- 旭山自然調査隊 （札幌市）
- 手稲さと川探検隊 （札幌市）
- 当別森林ボランティア「シラカンバ」 （札幌市）
- ようてい木育倶楽部 （札幌市）
- 積丹グリーン （積丹町）
- 旭川森林ボランティア倶楽部 （旭川市）
- 沼田どってこどってこ （沼田町）
- フォレストクリエイトタック （当麻町）
- えりも森の歩人 （えりも町）
- 魁！自然塾 （恵庭市）
- 北海道文教大学自然体験活動ボランティアサークル つむぎ （千歳市）
- お母ちゃんラボ （室蘭市）
- 地球岬街道夢の森づくりの会 （室蘭市）
- NPO法人 ビオトープ・イタンキ in 室蘭 （室蘭市）
- NPO法人トラストサルン釧路 （釧路市）
- 森と川のがっこうコロポックル （標津町）
- 森林ボランティア「オホーツクの会」 （北見市）
- 帯広の森サポーターの会 （帯広市）

Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.32」いかがでしたでしょうか。今後の情報発信のために、アンケートにご協力をお願いします。

Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。

Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？
右からそれぞれお選び下さい。

- 森あそび研究所（P4,5）
- クマと私たちの間に（P6～11）
- 木づかい（P12） 大きな木の小さな物語（P13）
- ほっかいどう 森のイキモノSOS（P14,15）
- 木育エッセイ（P16）
- あすもりレポート（P17～19）

Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？（はい・いいえ）

Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。

Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

PRESENT!



アンケートにご回答いただいた方から抽選で1名様に、「野つけうるし」さんから、網走の漆を仕上げに使った拭き漆のおさじをプレゼントします。

※プレゼントの当選発表は発送をもって替えさせていただきます

応募方法 アンケートの回答は右の二次元コードより、住所・氏名・連絡先のご記入と合わせてお願いいたします。

アンケート回答フォーム

応募締切 11/2(月)

※あすもりやモリイクについてのお問合せは右の「お問合せフォーム」二次元コードからどうぞ

お問合せフォーム

コープさっぽろ組合員活動部環境推進グループ
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号